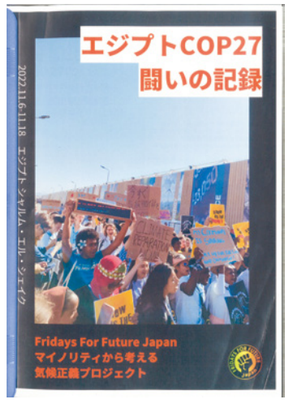
活動現場から、「このたびカタチになりまして」

報告書「エジプトCOP27闘いの記録」

Fridays For Future（未来のための金曜日）は、近年猛威を振るっている嵐や干ばつなどの気候変動問題や、環境破壊、それに伴う人権侵害に取り組む世界規模のNGOです。世界7500以上の都市で若者が中心となって活動しており、日本では2019年2月に東京から始まり、現在では20以上の地域に広がっています。仙台でも高校生や大学生、若手社会人がFridays For Future Sendaiとして環境問題に声を上げる活動をしています。

2022年11月にエジプトで開催された国連気候変動枠組条約第27回締約国会議（COP27）。各国政府の担当者が気候変動への対応、温室効果ガスを減らすための取り組みについて議論する場に世界中の環境活動家も集まり、気候変動対策を求めて抗議アクションを行いました。Fridays For Future Japanの7名（うち仙台から2名）もエジプト入りし、各国の活動家たちと交流し連携を深めながら、企業や環境省職員への質問、気候変動の影響を大きく受ける途上国支援のための基金設立を求めるなど、さまざまなアクションを行いました。現地での2週間の活動の様子をまとめた報告書が完成しました。

※こちらの報告書は、サポセンで読むことができます。



Fridays For Future Japan

Fridays For Future Sendai

活動に役立つ書籍を紹介「お役立ち本」

チーム・ビルディング　人と人を「つなぐ」技法

市民活動をする中で「チームがバラバラでまとまらない」といったことはありませんか。「社会課題を解決したい」と主体的に集まった人たちの力がうまく発揮され、相乗効果が生まれる活き活きとしたチームをつくるにはどうしたらよいのでしょうか。本書で扱うチーム・ビルディングとは、活き活きとしたチームをつくるための考え方や技法のことです。アイスブレイクのように、一つ一つの会議やワークショップの中で使える技術だけでなく、チームの立ち上げ時のメンバー選定やメンバーとの関係づくりといった長期的な視点も学べる1冊です。

著者：堀公俊＋加藤彰＋加留部貴行　発行所：日本経済新聞出版社

つながる つなげる サポセン

仙台市市民活動サポートセンターとは

様々な分野の市民活動、ボランティア活動の支援施設です。
「自分たちのまちをもっと良くしたい」。そんな市民の自発的な活動を応援します。お気軽にご相談ください。

今月の休館日　6月14日（水）、28日（水）

開館時間	月曜日～土曜日 9:00-22:00 日曜日・祝日 9:00-18:00
休館日	毎月第2・第4水曜日（祝日の場合は翌日木曜日）年末年始

〒980-0811　仙台市青葉区一番町四丁目1-3
TEL 022-212-3010　FAX 022-268-4042
[ホームページ]https://sapo-sen.jp
[サポセンブログ＠仙台]https://blog.canpan.info/fukkou/

「ぱれっと」バックナンバーは ホームページからダウンロードできます。 ▶▶▶

ほぼ毎日更新している「サポセンブログ@仙台」で、取材の様子やこぼれ話を配信しています。

編集・発行
仙台市市民活動サポートセンター
（指定管理者：特定非営利活動法人
せんだい・みやぎNPOセンター）
発 行 日　2023年6月1日
デザイン　PEACE Inc.

[Twitter]
@SCSC4CA

[YouTube]
サポセンちゃんねる

ぱれっと 6

2023 No.286

仙台市市民活動サポートセンター通信 ぱれっと

特集　どこからともなくやってきて 被災者の心に寄り添う「国境なき劇団」

“ぱれっと”には、仙台市市民活動サポートセンター（サポセン）にいろいろな人が集まり、それぞれの色（個性）が発揮され、新しい出会いや活動が生まれていく。そんな願いがこめられています。

一歩踏み出す気持ち芽生える「ワクワクビト」

仕事を通して まちの課題解決に取り組む

株式会社丸山運送/STUDIO080　コミュニティマネージャー
栃山（とちやま） 剛（つよし）さん（38）

栃山さんは社内ベンチャーで立ち上げたシェアオフィス「STUDIO080」を学生インターンとともに運営し、地元企業と学生のつながりを創出しています。

子どもの頃、芸能活動をしていたことから服飾に興味をもち、東京でアパレル業界に就職。店舗勤務の後バイヤーとなり、海外からの買い付けを担当し貿易に関わっていた2011年、東日本大震災が発生しました。東北の店舗で働いたこともあり、「とりあえず着る物としての服」ではなく、「服を着て表現をする日常を取り戻してほしい」との思いを抱いた栃山さん。さまざまな服飾ブランド担当者による復興支援プロジェクトに参加し、「段ボール1個でもいいから仙台港での貿易を再開させたい」と奔走。しかし、原発の風評被害により外国企業の反応は鈍く、仙台港に拠点を置く事業者は軒並み被災して交渉が難航する中、唯一取り引きしてくれたのが丸山運送でした。気概と縁を感じたこと、地域にもっと貢献したい思いが芽生えたことで2012年に転職しました。

ほどなくして、宮城の中小企業が抱える課題に気づきました。新卒の応募がほぼなく、人材不足で新規事業を生み出しにくくなっていること。採用も新規事業開発も復興や地域経済のためには必要です。アパレル時代に培ったマーケティングや営業のスキルを活かして貢献できるかもしれないと提案し採用に取り組んでみると、10人の新卒採用ができ、その後も毎年採用できるようになりました。県内の他社からも注目され、自分が応えられる分野だと手ごたえを得た栃山さん。会社が運送業の枠にとらわれずに新たなものを生み出していくビジョンを持っていることもあり、STUDIO080を立ち上げました。

STUDIO080では学生と地元企業、異業種がつながることで、プロジェクト拡大や新規事業が生まれてきています。「学生たちが力をつけ、活躍する姿を見るのがとても楽しい」と話す栃山さん。震災から12年が経ち、復興の先の未来を生きる彼らZ世代に期待を寄せています。

STUDIO080（スタジオゼロハチゼロ）

株式会社丸山運送が運営する、元印刷工場をリノベーションしたシェアオフィスです。2019年4月にオープンしました。学生インターンが運営に加わることで、学生と地元企業が出会い、協働する機会をつくっています。学生インターンたちは2020年に学生団体CARAV@Nを立ち上げ、企業との交流で気づいた地域課題の解決に取り組んでいます。

▲HP

特集

協働による活動事例を紹介「ちまたのコラボ」

どこからともなくやってきて 被災者の心に寄り添う「国境なき劇団」

「国境なき劇団」は、阪神淡路大震災（1995年1月17日）、東日本大震災（2011年3月11日）、熊本地震（2016年4月14・16日）の3つの大災害をきっかけに立ち上がった団体です。「どんな時でも人の心に寄り添い続けられる演劇人でありたい」という思いに賛同した日本全国の演劇に関わる人などによって、広がり続けている協働のネットワークをご紹介します。

国境なき劇団

NPO法人大阪現代舞台芸術協会（DIVE）
理事 ののあざみ さん

×

ARCT
ののした たかし
代表 野々下孝 さん

×

SASHIYORI Art Revival Connection KUMAMOTO（SARCK）
まつおか ゆうこ
代表 松岡優子 さん

×

日本全国の俳優、演出家、劇場、舞台関係者

被災した人が少しでも感情を出せる時間を届けたい

災害時の被災者は、「まず生きる」ために、大切なものや人を失った悲しさを無意識に抑え込んだり、普段とは違う生活の辛さを表に出せなかったりすることがあります。これに対し、日ごろからネットワークを築くことで迅速な支援につなげようとしているのが、日本各地の俳優や演出家、劇場、舞台関係者などで構成される「国境なき劇団」です。指針は過去の大規模災害時に、演劇に関わる人たちが実践してきた被災者への心のケア。演劇公演だけでなく、側で話を聞いたり、子どもたちが全力で遊べる機会をつくったり、心身を健康に保つストレッチを伝えたりと、被害の状況や求められていることに応じて活動してきました。その事例や手法を共有しながら、いざという時に被災地と他地域の国境なき劇団メンバーが協力し合えるよう関係を深めています。

核となり運営しているのは、大阪市のNPO法人大阪現代舞台芸術協会（以下、DIVE）と、仙台市のARCT、熊本市のSASHIYORI Art Revival Connection KUMAMOTO（以下、SARCK）。3団体に共通しているのは、それぞれが、阪神淡路大震災、東日本大震災、熊本地震という大災害を経験し、被災地で演劇的手法によって被災者の心に寄り添ってきたことです。

▲心身を健康に保つためのストレッチの一例

被災者の心に寄り添ってきた経験のバトン

ARCTの活動は、東日本大震災の発災から15日後、居ても立ってもいられない思いを持った仙台市内の演劇人が集まりスタートしました。しかし、被害が少なかった人から、大切な人を亡くした人まで様々な状況の人たちが集まる中で感情がぶつかり合い、「何かしたいけど、演劇に何ができるのか」と、意見はまとまりませんでした。そんな時、「使っても使わなくても良いけど、自分たちの時はこうだったよ」と、阪神淡路大震災での知見を伝えに来仙したのがDIVEなど関西の演劇人。ARCT代表の野々下孝さんは「風のように圧迫感なく来てくれたのが有り難かった。自分たちも混乱している中では、何が必要?と問われること自体が苦しくなっていたから」と振り返ります。DIVEの前身である関西演劇人会議は、阪神淡路大震災で全国からの演劇人や劇団に関する支援の集約を担いましたが、インターネットやメールもない当時は電話が殺到。その混乱を知っていたからこその対応でした。

DIVEの経験からARCTが参考にしたのは、被災直後であれば演劇ワークショップよりも、現地に寄り添う活動が求められること。そこでARCTの若手俳優は、稽古で鍛えた体力を活かして被災者と泥かきで汗を流し、疲れ切った大人の代わりに退屈する子どもたちと相撲をとりました。その後行ったワークショップや公演では「一緒に相撲したお兄ちゃんが出てる!」と喜ばれ、自然に受け入れられることで俳優たちの力も存分に発揮できました。

▲保育所でワークショップを行ったARCTの活動の様子

その約5年後、熊本地震が発生。SARCKのはじまりは、代表の松岡優子さんの一歩からでした。自身も被災し、避難所で暮らした松岡さんでしたが、2度目の大きな揺れを観測した本震の夜、「演劇で何かできないか」と考えずにはいられませんでした。知り合いの演劇人にその思いを打ち明けたことで、ARCTの活動記録を入手。背中を押されたような気がして、避難所での声がけや、演劇の要素を取り入れたゲーム、ストレッチなどの活動に動き出しました。松岡さんは「遠方の友人に必要なものを尋ねられても『食べ物も寝る場所もあるし大丈夫』と答えてきた。でも一番は、自分たちの演劇の力でできる何かを探していたのかもしれない」と振り返ります。

次なる大規模災害に向けた演劇人ネットワーク

国境なき劇団のはじまりは2018年から始動した、ARCT、DIVE、SARCKの3団体によるプロジェクトThe First Action Project（以下、TFAP）でした。ARCTは熊本地震の際、熊本の演劇人の力になりたくても現地とのつながりがなく、もどかしい思いを経験。「普段からのネットワークがあれば、もっとできることがあるかもしれない」という思いが、団体同士を引き合わせました。3団体をはじめ心の復興活動に関わってきた人を招いての意見交換会を皮切りに、被災地で行った活動の報告・座談会を各地で開催。夜眠るための体ほぐしを伝えるワークショップなどを行いながら演劇人同士の交流を深め、2021年にはTFAPメンバーで国境なき劇団を設立。2022年からは、国境なき劇団に参加するキーマンネットワークを広げるため、「四十七士つながるプロジェクト」と題してメンバーを募集。現在、18都道府県の37人にまで拡大しています。

▲避難所を回るSARCKのメンバー

活動を続ける中でDIVE理事 ののあざみさんには気づきがありました。「私は阪神淡路大震災当時まだ学生で、被災地での活動は経験していないけれど、経験していなければ支援活動ができないわけじゃない。一緒に考えて良いんだと勇気をもらった」と話します。

自然と協力し合える関係性を目指して

つながった各地の演劇関係者からは、「災害時に何かしたい気持ちはあったが、誰とどうつながれば良いかわからなかった」「こんな場がずっと欲しかった」という声があった一方、「近隣の県とネットワークがない」など、地域エリア内での課題も浮き彫りに。そこで国境なき劇団では、全国のつながりだけでなく、地域エリアごとに合わせたネットワーク構築や活動の在り方を模索しているところです。「次起こり得る災害時、何もできず後悔したくない」。演劇人たちの熱い心意気が共感の輪を広げています。

国境なき劇団　HP▶

▲演劇関係者が意見を交換し合ったTFAPミーティングの様子